

「思い出のおそろいのリュック」

「ばあば」とおそろいのミッキーマウス柄のリュック。

私の叔父(祖母にしてみれば息子)の結婚式に出席するために、2010年11月下旬、京都・奈良へおそろいのリュックで旅行することになりました。

当時男子校に通う高校2年生の私にとって、祖母とおそろいのリュックで出かけるのは、少し気恥ずかしくもありました。

しかし、その頃、両親が離婚した私にとって、祖母はなんでも言えて甘えられる存在で、一緒にいるとどこか温かい気持ちになれ、だから、「まるくんとおそろいだ!」とはしゃぐ祖母と京都・奈良の風情ある街並みを楽しみながら歩き回りました。

今となっては、そのおそろいのリュックを背負って町を歩いたのが、鮮明に覚えている私と祖母との最後の思い出となってしまいました。



後世へ伝えたい想い

私にとって、祖父母はまだどこかで生きているという感覚です。

たしかに、2011年3月14日、まだ家の残骸やヘドロが残っている中、南浜町にあった祖父母の実家まで行き、家の中でうつ伏せで冷たくなっていた祖母を母と見つけ、その後、自衛隊の方が日和大橋付近で見つけてくださった祖父の遺体と共に、火葬して骨だけになったところを目の当たりにしています。

それでも、どこか遠くで2人が静かに生きている気がしてならないのです。ただ、そう思っただけでも、二人から連絡が来ることはありません。

東京の大学へ進学、イギリスへ1年間留学し、大学院にも進学して、多くの出会いに恵まれ、自分の世界が広がった話を2人に聞かせたら、誰よりも喜んでくれただろうに…。

もしかしたら、もう会えないと頭のどこかで感じているからこそ、他の何もかもがどうでもよくなるくらいに包み込んでくれる「じいじ・ばあばの温もり」を、私はいつも追い求めているのかもしれません。

みなさんは、親友や好きな人、大切な人と一緒にいるとき何を感じますか？パズルのピースがピタリとはまったような感覚、電撃が身体中を走るような感覚、海辺で過ごしている時にやんわりと通り抜けていく風を感じているような感覚など、人によって感じるものは違うと思います。

そのような感覚を二度と感ずることができなくなるだけでなく、その感覚をいつまでも追い求めてしまうようになる、それが震災だと私は思います。

防災・減災の一步は、あなたにとっての大切な人と一緒にいる時の「温もり」を1秒1秒噛み締めることなのかもしれません。

祖父・祖母と共に